

学力向上を図るための全体計画

墨田区立第三吾嬬小学校

1 学力に関する本校の特徴

(1) 29年度の区学習状況調査の結果分析及び考察

①学校全体の各教科学力の傾向

平成29年度の学習状況調査（区）の観点別正答率の平均値を、本校と全国で比較してみた。尚、本校値とは2～6年の正答率の平均値である。

〔国 語〕

- ◎全般的に非常に良好な状況である。教科の正答率は80pを超え、昨年度と比べても大幅に向上した。
- ◎特に、書く能力、関心・意欲・態度の観点で全国値を5p以上上回っている。
- 他の観点も、概ね3p以上全国値を上回っており、良好である。
- 昨年度唯一全国値を若干下回った読む観点も今年度は3p全国値を上回った。国語が好きと答える児童が多くなり、文章に対する拒否感が薄まってきた。

28年度 国語全	関心・意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	言語の知識・理解・技能
校内	77.4	74.6	78.3	68.9	71.5
全国	75.6	71.1	76.3	64.7	71.8
差	1.7	3.5	2.0	4.2	-0.3

29年度 国語全	関心・意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	知識・理解・技能
校内	81.4	78.6	76.8	78.7	76.6
全国	77.4	73.6	73.8	72.3	73.4
差	4.0	5.0	3.0	6.4	3.2

〔社 会〕

- 昨年度全観点に渡って全国値を下回ったが、今年度は、ほぼ全国値と同等になるまで回復基調となった。
- △関心・意欲・態度が全国値を3.1p上回っているが、それが他の観点を引き上げるまでには至っていない。
- 知識理解は若干全国値を上回ったが、これは学習の定着を図る学習の効果である。
- △観察・資料活用能力、思考・判断・表現能力が低調なため、授業改善の課題として解決したい。

28年度 社会全	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	知識・理解
校内	58.2	51.8	52.5	56.3
全国	62.3	54.7	55.8	60.8
差	-4.1	-2.9	-3.3	-4.5

29年度 社会全	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	知識・理解
校内	73.3	69.7	67.6	71.0
全国	72.4	66.6	67.2	72.1
差	0.9	3.1	0.4	-0.9

〔算 数〕

- △28・29年度の正答率の傾向がほぼ同じであり、全国値に近い正答率である。
- △関心・意欲・態度が28年度と比べ低下している事は懸念材料である。数学的に問題解決に取り組む楽しさを育てていく必要があるが、そのためにも問題を解決するための思考ツールを低学年のうちから指導していきたい。

28年度 算数全	関心・意欲・態度	数学的な考え方	数量や図形の技能	数量図形の知識・理解
校内	74.8	64.3	64.8	78.2
全国	74.7	62.0	64.2	78.2
差	0.1	2.3	0.6	0.0

29年度 算数全	関心・意欲・態度	数学的な考え方	数量や図形の技能	数量図形の知識・理解
校内	75.8	58.7	65.7	78.5
全国	75.7	59.2	65.4	78.4
差	0.1	-0.5	0.3	0.1

[理 科]

- ▲全ての観点で昨年度を下回っている。
- ▲特に、関心・意欲・態度が全国値より6.5p低いことは大きな課題である。このことが全ての観点の正答率を下げている要因である。
- ▲観察・実験の技能がさほど低くないことから、実験や観察には取り組んでいるが、そこから得られる知識の定着が不確実である事、知識が不安定なため、科学的思考に支障を来していると推測する。

28年度 理科全	関心・意欲・態度	思考・表現	観察・実験の技能	知識・理解
校内 65.1	61.7	57.7	67.5	69.2
全国 66.6	64.8	61.0	64.4	70.5
差 -1.5	-3.1	-3.3	3.1	-1.3

29年度 理科全	関心・意欲・態度	思考・表現	観察・実験の技能	知識・理解
校内 65.3	65.6	58.1	70.5	68.0
全国 69.1	72.1	62.2	70.1	71.8
差 -3.8	-6.5	-4.1	0.4	-3.8

まとめ

今年度は、理科以外の教科で伸びが認められた。

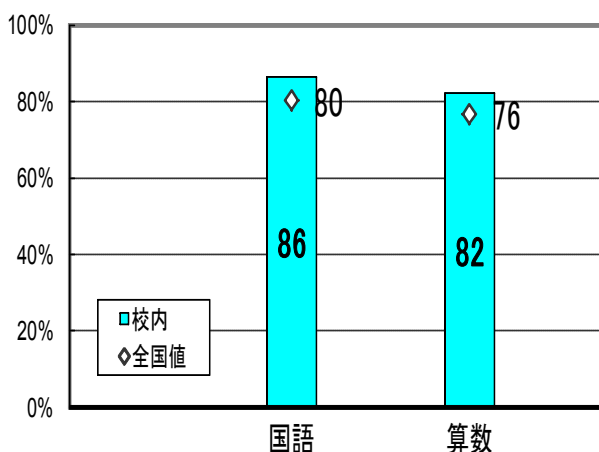
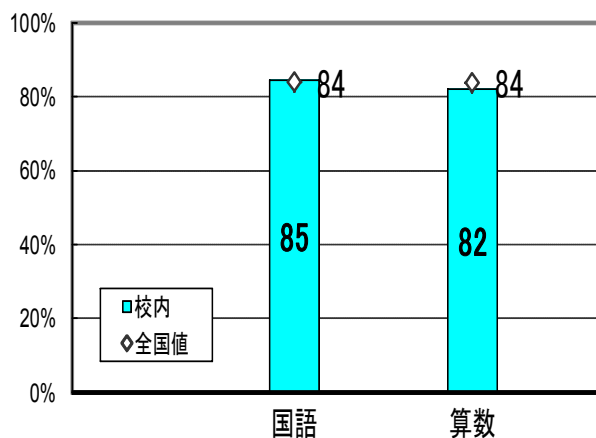
特に、国語の成績の伸びが大きく、国語研究の成果が現れている。これからの指導を考えて行くとき、児童の言語能力の向上は明るい材料である。

算数は前年度と同程度の成績であるが、算吾タイムの取り組みやベーシックドリルの活用学習が効果を現している。理科に課題が残されたが、今年度の大きな改善目標として取り上げ、授業改善を図っていきたい。

②各学年の学力傾向

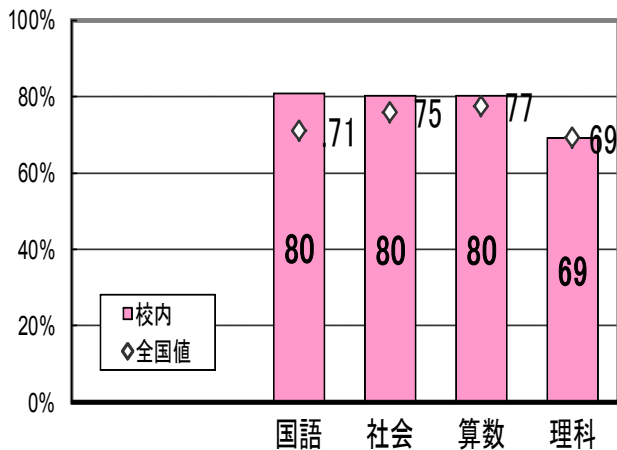
[2年生]

- 国語は全国値より若干上回る正答率でほぼ同等である。
- △算数は全国値を若干下回る。
 - ・例年、2年生は全国値を上回る正答率であるが、今年度はやや低調な正答率である。
 - ・基礎的な学習の積み上げを重視し、3年生につなげないと、2～3年の学力ギャップにより、成績がかなり悪化することが予想される。



[3年生]

- ◎国語は全国値を6p上回り、良好な成績を残した。
- ◎算数も全国値を6p上回り、良好な成績である。
 - ・2年生までの基礎的な学習が定着していることがこの成績を残した要因であると考えられる。

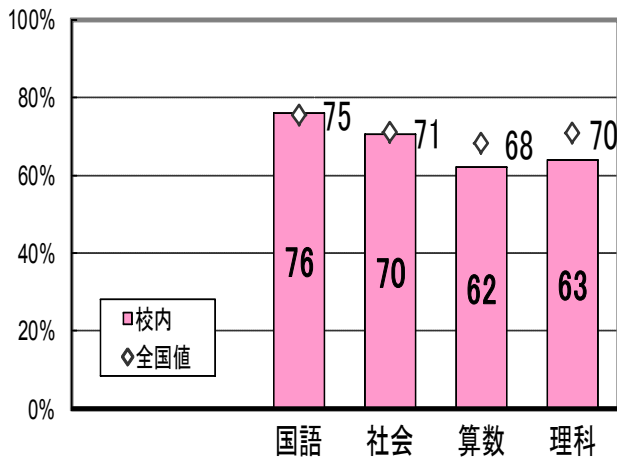
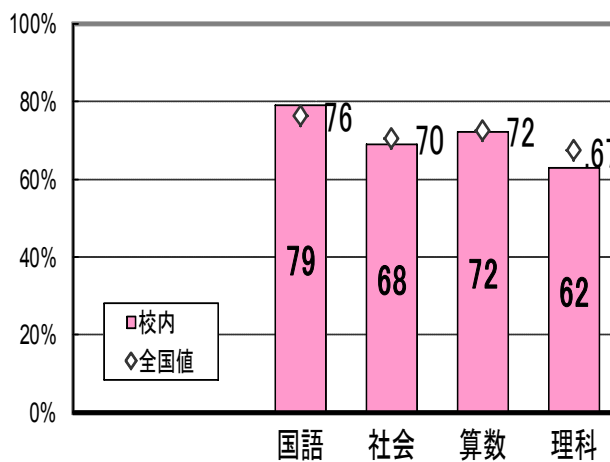


〔4年生〕

- ◎国語は、全国値を 9p 上回り上々の成績である。言語能力向上をめざした授業の成果である。
- 社会は、3 年時の地域学習に力を入れた指導もあり、全国値を 5p 上回った。
- 算数も着実に学習しており、全国値を 3p 凌いでいる。
- 理科は、全国値とはほぼ同等の成績である。高学年に向けて、授業を工夫し理科の楽しさと共に確実な知識の定着を図りたい。

〔5年生〕

- 国語は、全国値を 3p 上回るが、中学年より勢いはない。今後もしっかりした指導を行わないと成績は下降する。
- △社会科は全国値を 2p 下回り、やや振るわない。4 年生の地域学習がやや不足していると考える。
- 算数は、全国値とほぼ同等であった。
- ▲理科は、全国値を 5p 下回り、指導の改善が必要である。
- ・本学年は昨年までは本校では学力が高い方であったが、下降傾向にある。



〔6年生〕

- 国語は全国値とほぼ同等の成績である。文章が難しくなっているが、国語力が付いてきている。
- 社会は、全国値を若干下回るが、ほぼ全国値と同等であった。
- ▲算数は、全国値を 6p 下回る。既習事項の基礎を補習等で今一度洗い直す必要がある。
- ▲理科は、7p 全国値を下回る。理科授業には楽しく学習しているが、知識の定着と科学的思考に課題がある。

まとめ

- ・国語は、全学年とも良好な成績を残した。校内研究の成果として、学年共通の学習過程、読む・書く・交流するを組み合わせた授業づくりの成果が現れたものであると考える。
- ・中学年はどの教科も良好な成績であるが、学年が上がるにつれて成績が少しずつ下降し、特に算数・理科で顕著である。
- ・高学年の理科が不調である。要因として、既習知識の定着不足。知識が曖昧なため科学的な思考に学習が及ばず成績が下降し、理科苦手意識が生まれるという悪循環が考えられる。

③各教科の観点別学力

小学校2年 こくご	教科	基礎	活用	関心・意 欲・態度	話す・聞 く能力	書く能 力	読む能 力	知識・理 解・技能
校内 平均正答率	84.6	88.3	67.1	81.7	76.2	84.7	71.4	95.4
区 平均正答率	84.2	87.5	68.5	81.1	75.8	84.6	71.2	95.4
全国 平均正答率	83.8	87.2	67.8	81.0	75.3	84.8	69.6	95.7

小学校3年 国語	教科	基礎	活用	関心・意 欲・態度	話す・聞 く能力	書く能 力	読む能 力	知識・理 解・技能
校内 平均正答率	86.6	90.1	72.7	81.0	74.7	86.2	78.1	92.4
区 平均正答率	82.7	85.9	69.9	74.5	72.6	75.7	75.3	90.1
全国 平均正答率	80.3	84.1	65.1	71.8	67.8	74.3	70.9	89.1

小学校4年 国語	教科	基礎	活用	関心・意 欲・態度	話す・聞 く能力	書く能 力	読む能 力	知識・理 解・技能
校内 平均正答率	80.9	84.1	66.8	78.2	77.3	74.5	77.4	82.9
区 平均正答率	75.5	78.4	62.9	74.0	74.8	69.7	75.0	75.3
全国 平均正答率	71.1	73.7	59.4	68.3	70.6	62.3	68.9	72.8

小学校5年 国語	教科	基礎	活用	関心・意 欲・態度	話す・聞 く能力	書く能 力	読む能 力	知識・理 解・技能
校内 平均正答率	79.1	81.2	69.4	78.0	88.2	72.0	81.4	77.2
区 平均正答率	77.0	78.5	69.9	77.8	87.5	72.1	81.3	72.9
全国 平均正答率	76.2	77.8	68.7	76.4	87.4	70.2	79.7	72.9

小学校6年 国語	教科	基礎	活用	関心・意 欲・態度	話す・聞 く能力	書く能 力	読む能 力	知識・理 解・技能
校内 平均正答率	76.1	80.4	56.3	74.1	67.7	76.1	74.4	76.1
区 平均正答率	75.5	79.1	58.7	71.3	67.2	70.7	78.5	74.6
全国 平均正答率	75.4	79.3	57.4	70.6	67.6	70.0	78.3	74.9

国語

◎2～5年は全項目に渡って全国値と同じか上回っている。

◎特に3年生・4年生は優秀な成績である。

・関心・意欲、書く力は全国値を10p凌ぐ成績である。

○2年生、5年生は全国値と同等の成績である。

△6年生はやや低調であり、読む力や応用に課題が残る。

・国語は良好な成績であるが、「読む力」に弱さが見られる。

社会

◎4年生は大変優秀な成績であり、全項目全国値を凌ぐ。

△5・6年生は昨年度と比べると向上したが、全国値を下回る正答率である。

△観察・資料活用能力、思考・判断・表現に弱みがある。

これは、授業形態が問題解決型になっていないこと、具体的に観察や資料活用をあまり行っていないことに起因していると考えられる。

4年 社会	教科	基礎	活用	関心・意 欲・態度	思考・判 断・表現	観察・資 料活用	知識・ 理解
校内 平均正答率	80.3	84.1	60.3	70.2	71.4	78.0	83.2
区 平均正答率	78.4	81.9	60.1	69.0	69.7	75.9	81.4
全国 平均正答率	75.8	79.9	54.2	62.9	65.5	75.1	78.6

5年 社会	教科	基礎	活用	関心・意 欲・態度	思考・判 断・表現	観察・資 料活用	知識・ 理解
校内 平均正答率	68.9	71.7	57.7	70.8	64.9	65.2	73.8
区 平均正答率	70.1	73.3	57.3	70.5	66.9	67.4	73.2
全国 平均正答率	70.5	73.6	58.1	68.5	68.4	69.0	71.8

6年 社会	教科	基礎	活用	関心・意 欲・態度	思考・判 断・表現	観察・資 料活用	知識・ 理解
校内 平均正答率	70.7	72.9	60.7	68.2	66.6	69.7	72.1
区 平均正答率	69.6	71.2	62.0	66.3	66.7	70.0	70.1
全国 平均正答率	71.0	72.6	64.0	68.5	67.7	72.2	70.9

小学校2年 さんすう	教科	基礎	活用	関心・意 欲・態度	数学的 考え方	数量図形 の技能	知識・ 理解
校内 平均正答率	82.0	88.1	53.1	64.3	69.8	85.8	82.4
区 平均正答率	83.6	89.1	57.5	66.8	72.1	86.5	84.6
全国 平均正答率	83.6	89.1	57.8	66.5	72.5	86.2	84.6

小学校3年 算数	教科	基礎	活用	関心・意 欲・態度	数学的 考え方	数量図形 の技能	知識・ 理解
校内 平均正答率	82.3	88.2	53.2	65.1	73.6	84.5	83.5
区 平均正答率	77.8	82.5	54.1	60.1	71.4	80.9	76.2
全国 平均正答率	76.7	82.0	50.2	58.2	68.6	80.0	75.6

小学校4年 算数	教科	基礎	活用	関心・意 欲・態度	数学的 考え方	数量図形 の技能	知識・ 理解
校内 平均正答率	80.3	83.1	68.9	71.0	70.2	83.0	78.8
区 平均正答率	79.9	82.6	68.4	75.0	69.3	81.5	80.8
全国 平均正答率	77.4	80.5	64.8	71.0	66.1	79.8	77.0

小学校5年 算数	教科	基礎	活用	関心・意 欲・態度	数学的 考え方	数量図形 の技能	知識・ 理解
校内 平均正答率	72.2	76.5	51.4	61.1	64.7	73.3	72.6
区 平均正答率	70.5	74.5	51.5	62.5	62.5	72.1	70.9
全国 平均正答率	72.5	76.4	53.6	62.8	63.8	74.2	72.6

小学校6年 算数	教科	基礎	活用	関心・意 欲・態度	数学的 考え方	数量図形 の技能	知識・ 理解
校内 平均正答率	62.2	66.0	43.8	32.0	50.4	66.2	62.1
区 平均正答率	65.6	69.0	49.1	40.0	54.7	69.0	67.2
全国 平均正答率	68.1	72.3	48.1	37.2	56.1	71.7	69.9

算数

△3～6年では、学年が上がる毎に正答率が下降していく傾向がある。

算数は学習の積み上げが特に顕著に出る教科であるため、中低学年での理解不足が高学年で影響している。

また、中学年までは、基礎的な知識や技能の習熟があれば、ある程度の正答率が上がる傾向がある。しかし、高学年では数学的な思考が大切になってくるが、この力がついていないことが要因となっている。

▲6年生は前年度と比べて正答率が下降した。また、前年度は全国値を上回っていた学年だけに、原因の究明が必要である。

▲5・6年の関心・意欲・態度の低さが懸念される

理科

▲特に、5・6年の正答率が低い。

▲5年生は、昨年度は全国値を上回っていたが、大きく後退した。

▲6年生は、昨年度も不得意科目であったが、更にそれが進行している。

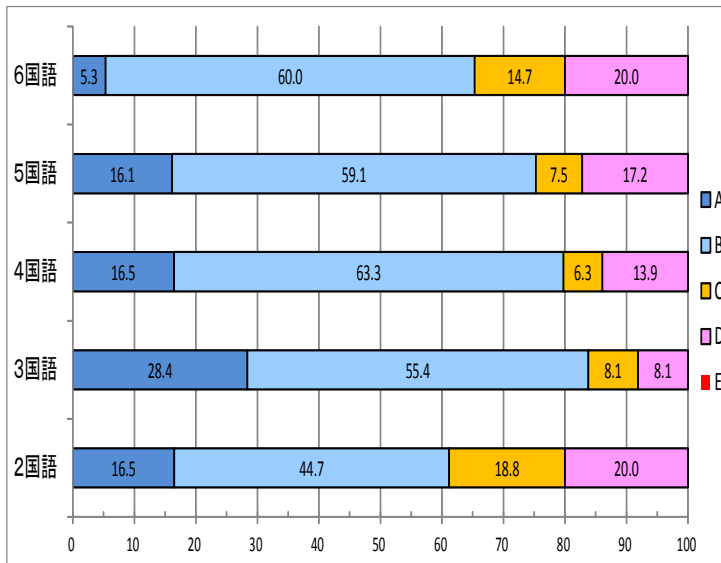
▲各観点とも、全国値を大幅に下回るが、関心・意欲・態度までもが高学年では全国値比-10pとなっており、児童に理科苦手意識が出てきてしまっている。

小学校4年 理科	教科	基礎	活用	関心・意 欲・態度	思考・ 表現	観察・実 験技能	知識・ 理解
校内 平均正答率	69.2	73.8	50.6	71.1	61.9	70.9	71.4
区 平均正答率	67.5	71.7	50.6	69.1	62.2	64.7	69.7
全国 平均正答率	69.2	73.5	52.3	73.0	62.5	66.5	71.5

小学校5年 理科	教科	基礎	活用	関心・意 欲・態度	思考・ 表現	観察・実 験技能	知識・ 理解
校内 平均正答率	62.9	67.7	43.1	58.1	49.5	80.1	67.5
区 平均正答率	61.4	67.0	38.3	60.4	50.0	75.8	64.9
全国 平均正答率	67.3	72.8	44.5	66.3	56.3	79.3	70.7

小学校6年 理科	教科	基礎	活用	関心・意 欲・態度	思考・ 表現	観察・実 験技能	知識・ 理解
校内 平均正答率	63.9	66.3	55.6	67.8	63.1	60.6	65.2
区 平均正答率	63.8	65.3	58.9	69.5	61.7	56.5	66.5
全国 平均正答率	70.7	72.3	65.3	77.2	67.7	64.4	73.1

④A～E層別割合から見た教科別学力の状況

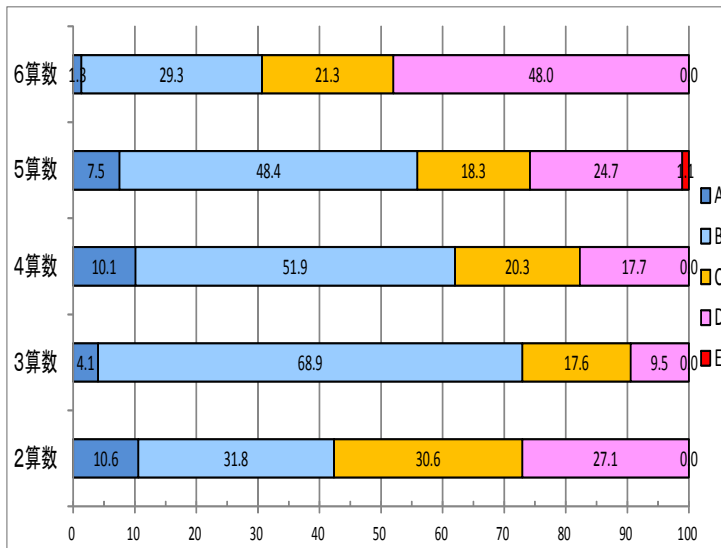
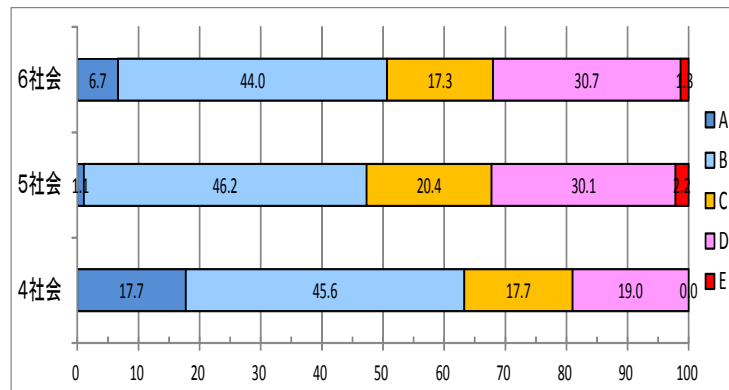


国語

- ◎全学年 AB 層が 60 % を超えており非常に良好な状況である。
- ◎特に、3・4年生は AB 層が 80 % を超えており良好。
- △3年生から学年が上がるにつれ、D 層が増加する傾向にあり、それに伴って AB 層が減少していく。
- △例年の2年生と比べると成績は低調である。2年生は基礎的基本的な学習の習熟を大切にしないと、次年度の3年生では成績が下降することが予測される。

社会

- 昨年度と比べて、AB 層の割合が増加した。
- D 層を 30 % 以下に押さえ込めたのも今年度の成果である。
- △5・6年生の E 層の児童の存在と D 層を 20 % 前半に押さえ込むことが今後の課題である。

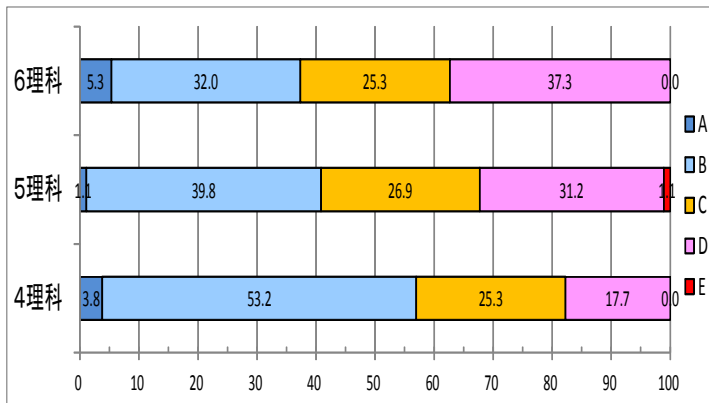


算数

- △3年生から学年が上がるにつれ、D 層が増加する傾向にあり、それに伴って AB 層が減少していく。
- △例年の2年生と比べると成績は低調である。2年生は基礎的基本的な学習の習熟を大切にしないと、次年度の3年生では成績が下降することが予測される。
- ▲6年生の成績が振るわない。D 層が 50 % 近くいることは、指導上の大きな課題である。

要因として、

- ・問題解決学習が効果的に導入されていないことから、興味関心の喚起、数学的な思考力の弱さが高学年算数に適応できなくしている
- ・数学的に考える思考ツールが低学年のうちから指導されていない
- ・習熟が弱く、基礎的な技能や知識の定着が脆弱なことなどが考えられる。これは学校全体の課題であり、改善していきたい。



理科

- ▲ 学年が進行する毎に AB 層と D 層の 2 極化が顕著になる。
- ▲ 特に 6 年生は D 層が 37.3 % となっており、理科学習がわからない状況である。
- ▲ A 層がどの学年も極度に少ない。この状況の要因として、
 - ・ 実験・観察は楽しんで行うが、その結果からわかったことを導

き出し、既習事項を整理してまとめ定着させる学習活動に不足がある
 ・ 理科学習の進め方がわからない
 などが考えられる。

区学力向上 3 か年計画の目標の達成度

- 1 〔目標〕 D・E 層の児童数が全体の 40 % 以下 **ほぼクリア**
 - ・ 6 年生の算数 48 % 以外は 40 % 以下
 - ・ 国語は 2・6 年が 20 % を下限とし、3 年生は 8.1 % の低比率である。
 - ・ 社会、理科は、2 極化傾向が顕著である。
 - ・ どの教科も、学年が上がるごとに D・E 層が増加する。
- 2 〔目標〕 読む・書く・言語の知識理解における正答率が全国値以上 **73%達成**
 - ・ 15 項目中、2 年の書く力-0.1p、知識・理解-0.3p、6 年の読む力-3.9p の 3 項目以外は全国値と同じか上回った。
- 3 〔目標〕 思考・判断力における正答率が全国値以上 **36%達成**
 - ・ 11 項目中、4 項目しか上回らなかった。
 - ・ 5・6 年の社会・理科に弱みが顕著である。

(2) 児童の様子について

「学習はするものである」という認識が、児童・保護者の間に浸透してきている。そのため、怠学的傾向の児童はかなり減少し、授業に積極的に参加する児童が増えてきた。

■ 力不足の言語能力

本校児童に特徴的な傾向は、言語能力に課題がある児童が多く、文字に親しむ環境やコミュニケーションを通して学ぶ環境が身近に不足していることである。そのため、教科書やテストの問題が読めない、考えがもてない、考えを書き表せないという状況が続いてきている。また、考えをもてないことから、コミュニケーションが上手にとれない児童も多い傾向にある。

近年はこの状況を改善すべく、本校では言語能力の向上を主眼とした様々な試みを実施した。考えを巡らせながら読む力を培い、考えを書いたり交流したりすることによって更に考えを深めたり広げたりする学習活動、読書に親しむ活動、俳句活動や手紙活動、言葉あつめ活動などを進めていった。これらの活動を通して、児童の「読む力」や「書く力」が向上してきている。

■ 論理的な思考力・表現力の不足

しかし、文章を読もうとする意欲、考えを書いて伝えようとする意欲は向上したが、文章を論理的に読む力、読んでつかった内容やもった考えを人にわかりやすく論理立てて発信する力に課題がある。そのため、算数や理科・社会の教科書やテスト問題を論理的に読み込めないことに起因して、国語科以外の学習成績の伸びが今一つ鈍く、算数の文章題や社会科・理科に苦手意識を

もっている児童が多い状況である。

論理的に文章を読み解く力、考えや思いを人にわかりやすく論理的に伝える力を育むことが本校の大きな課題である。

■ 学び方がわからない

算数・社会・理科で学び方がわからず、学力向上をスポイルされている児童が存在する。特に、社会科や理科でその傾向が顕著であり、成績の2極化し、理科に至っては関心・意欲が低下してしまっている。

この要因として、

- ・ 学習過程に学校としての標準化の不足
- ・ 学習の基盤となる生活経験や基本的な知識の少なさ
- ・ 学習を進めるスキルの弱さ

が考えられる。

授業を通して、児童の弱点を補完する授業構成が必要である。

2 重点的に取り組む目標

目標1 国語（説明文を読む力）の学力向上

〔全学年全国平均正答率を4 p以上上回る〕

課題

学習する際に必須となる「説明文を読む力」や「論理的に考えを伝える力」の不足が、全教科の学習に影響を及ぼしていること

目標2 算数（基礎学力の向上と考える力の育成）の学力向上

〔2～5年：全国平均正答率を2～3 p上回る。6年：±0 pとする〕

課題

「数学的な考え方」を育成する必要がある、その前提となる基礎的・基本的な技能や知識の積み上げが不足していること

目標3 問題解決学習型の授業（特に理科・社会）の実施

〔社会：全学年全国平均正答率を2 p上回る〕

〔理科：全学年全国平均正答率を±0 pとする〕

課題

- ・ 理科・社会では学力の2極化が顕著であり、知的な興味・関心を喚起する授業の実施が必要であること
- ・ 学習の仕方がわからないために苦手意識を持っている児童が多く、見通しをもった学習ができていないこと
- ・ 思考・判断力を培う学習に不足があること

3 課題解決のための具体的な取組

(1) 目標1 国語（説明文を読む力）の学力向上に向けて

① 児童の「説明文を読む力」を育む授業の実施

本校児童には説明的文章を主体的に読み、そこから情報を得る“読み解く力”が不足している。今年度の学力調査では国語力の向上がみられたものの、「説明的文章を読む力」に不足があることがわかった。また、読み取ったことを論理構成して伝える力にも不足がある。これを改善するために、次の取組を実施する。

■説明的な文章を「考えを巡らせながら論理的に読む力」を育む

- ・説明文を分析的に読めるようにするために、事実と意見や考えを明確に区別し、読みの目的や意図に即して必要な情報を取り出す読み方ができるようにする
- ・取り出した情報を自分の知識や経験と結びつけて解釈することによって、自分の考えをもつことができるようにする
- ・読みに必要な語彙を豊かにする活動を実施する
(考えの根拠となる語や文に着目する学習、辞書を身近に置かせ活用させる活動)
- ・児童が説明的な文章に触れる教育環境を整備する
(図書館の説明的な文章の蔵書の充実、発展学習の奨励)

■文章を読んでもった考えを「書く活動」や「交流活動」等のアウトプットする活動を行い、考えを広げたり深めたりする

- ・読み取らせたい事項について考えさせる書く活動や交流活動の目標の明確化。
- ・書く活動や交流活動を通して再構成した考えを書いて残す活動を取り入れる。
- ・考えをアウトプットする活動を通して考えをより確かなものとし、考えをもちながら読み進めるようにする活動の実施

■多様な交流活動を通して、考えをわかりやすく伝える力を育む

- ・読みの目的や意図に照らして、もった考えを構成や表現を工夫して伝えられるようにする
- ・他者の考えと比較、分類、関連づけなどを行うことで、多様な観点からその妥当性や信頼性を吟味し、自分の考えを深める
- ・交流活動を通して考えを深める「交流の視点」を明確にする
例：説明する際に、自分の考えの根拠、原因と結果などの関連を明らかにする
自分と他者の考えを比較し、その違いをとらえたり、異なる視点から自分の考えを検討したりして振り返る 等
- ・多様な交流学習の方法を開発する
例：ペア学習、グループ学習、パネルディスカッション、ディベート 他の効果的な活用と指導方法の開発

■指導の目標や内容を明確にした授業の実施

- ・各学年で、つけさせたい力、指導すべき事項を明確にした授業を実施する。また、指導の目標を達成できる毎時間の学習課題の設定を工夫する。
- ・指導の目標達成のための「授業のしかけ」を工夫し、全校でそれを蓄積する。

② 国語力向上を支える取組の推進

■言葉の特徴やきまり、文字に関する事項を習得させる

指導要領に示されている、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の定着が弱いため、言葉の働きや表記、語句に関する事項、文や文章の構成に関する事項、文字に関する事項に興味・関心をもたせる取組を実施する。

- ・「国語バック」を机に横にかけさせ、常に読書・辞書引き・言葉集め(マイことバンク)活動出来るようにし、言葉や文章と触れ合う機会を多くする。
- ・「マイことバンク」活動の実施……図書や辞書などから気に入った文や言葉、俳句や詩等を記録し、蓄積させる活動(専用バインダー採用)

■読書に親しむ児童を増やす

本校の児童は、本に接する機会が少ない。また、事象に直接接する生活経験が少ない傾向があり、様々な場面でこれらが学習活動に影を落としている。読書を通じた間接経験をさせることは、国語力の育成の観点のみに限らず、心の育成の観点からも読書活動を進めていく。

- ・読書課題を設定し、読書量を増やす取組を実施する。

- ・年間読破目標読書量の設定、読書カテゴリ表示機能を備えた統一読書カードの採用など、多様な図書に親しませる活動を実施する。
- ・ブックトーク（教員・児童）、課題図書・推奨図書の設定（印刷物やHP掲載）、アニメーション、など、読書に対する関心意欲を喚起する取組を実施する。
- ・読書環境の整備に努める（PTAとの連携活動を実施）

■俳句活動を展開し、美しい言葉や表現に鋭敏な感性をもつ児童を育成する

- ・季節ごとの定例会の実施方法を工夫し、活動のマンネリ化を防止する。
（写真俳句や季語を生かした提出日の選定、写実的な俳句の指導等）
- ・マイことバンク活動にファイルしてある俳句集を参考にして書き方や言葉を使って俳句をよむ。

■ノート指導の徹底〔全教科〕

- ・日付、学習課題、学習内容の記録、まとめ（文章化など）の校内統一書式を設定し、授業の中に必ず書かせる指導を行う。
- ・問題解決学習の道筋がわかるノートの記録方法を指導する。

■初見の文章を読み取り、設問に答える学習を実施する

- ・文章題プリントなどを一定時間に読み取り、設問に答える学習をおこなう。

（2）目標2 算数（基礎学力の向上と考える力の育成）の学力向上に向けて

本校の算数の状況は、3～5年生は全国値と同等かやや上回る正答率を残した。課題は4年生を境として算数の正答率が下降し、6年生は全国値を6p下回ったことである。また、これに伴って学年が上がるにつれてD層が増える状況である。

算数は積み上げが大切な教科であるため、5・6年になって算数が苦手にならぬよう、低学年からしっかりと学力の積み重ねをさせていかなければならない。

また、指導者は、この学年では「これだけは身に付けさせる」という指導事項を明確に定め、徹底指導していくことが大切である。

① 確かな基礎学力の定着を意図した授業づくりを行う

■低学年■ 徹底的な基礎知識・技能の定着と生活に根ざした算数指導の実施

・実物や実体験を大切にしたい指導の実施

本校児童は生活経験が極めて不足している児童が多い。例えば、数と実物との結びつきができなかったり、時間意識に乏しく時計と時間が結びつかなかったりなど枚挙に暇がない。そのため、できるだけ実物や実体験を大切にしたい指導を実施していく必要がある。

・算数で押さえるべき基礎知識・技能の徹底的習熟

例えばかけ算九九のように、全児童に徹底して反復練習させる。フラッシュカード指導や小テスト等も有効である。低学年は反復学習に抵抗が少ない時期であることを活用したい。

・算数的に考えるツールを指導する

ブロック操作やテープ図、基礎的な線分図やアレイ図など、考えを進めていく手立てを指導したい。これが中学年につながる。

■中・高学年■ 問題解決型の算数授業の実施

中学年で算数的な思考の楽しさを身に付けておかないと、高学年での主体的な算数学習は期待できない。算数的な思考の楽しさを味わわせる指導を怠った場合、児童の学力は2極化し、算数苦手児童を育ててしまう。中学年はまさに、算数学習の分水嶺であるため、基礎・基本の徹底的な習熟と知的な好奇心を喚起する算数授業を実施しなければならない。

・知的な興味・関心を喚起する学習課題の設定を大切に

問題から“児童の知的な好奇心を喚起する学習課題”をつくる段階が問題解決学習の成否を決める。この時間は（この単元は）何について考えさせるのか、課題設定までにどのような手順をとるのかを明確にしておくことが大切である。

・基本的で魅力的な学習過程を備えた課題解決型授業を行う

低学年から指導してきた“考えるツール”や既習の知識を使わせ、課題解決に向けた「自力解決の時間」を大切にしたい。その後、交流活動を取り入れ、皆で課題を解決する授業を積み上げていくことが、算数学習の楽しさにつながる。このような授業を実施していかないと、算数に対する関心・意欲が萎え、算数嫌いの児童を育ててしまうことに直結する。

・数直線や面積図など、問題をイメージ化し解決の糸口を見つけ出すツールを指導する

自力解決場面で、問題をイメージできない児童が多い。低学年のうちから培った思考ツールを高度化し、高学年算数にも適用できる思考ツールを指導していきたい。

・基礎的な指導事項や用語の徹底指導と定着を

中学年で算数の基礎的な指導事項は出そろそろ。技能や知識理解事項は中学年でしっかりと定着させることが高学年につながる。たとえ低学年でしっかりとした指導を行っても、中学年で指導に不足があると高学年での伸びは期待ができない。高学年児童のつまづきのほとんどは、中学年で指導事項の理解・習熟不足に起因する。

② 算数少人数指導の活性化を図る

算数少人数指導担当教員がレディネステスト等、児童の実態を踏まえた習熟度別算数指導の計画を立て、学級担任と連携をとりながら実施する。また、算数少人数指導担当教員の授業を本校の算数授業のパイロット授業に指定して常時公開とし、OJTの場とし授業力向上研修の柱とする。

③ 「算^{さんあづ}吾タイム」の効果的な活用を図る

6年前に創設した「算吾タイム」は、本校児童の算数力を支えている。ベーシックドリル等を活用し、基礎的な知識や技能の定着を図る。ベーシックドリルの活用は、家庭学習と組み合わせることで効果的な活用を行う。

④ 思考過程がわかるノート指導の実施

学習過程に沿って、1時間の学習が見えるノートのとり方を指導する。項目として、学習課題、自力解決、参考にしたい友達の考えや気づき、まとめ、練習、ふりかえりを予定。

(3) 目標3 問題解決型の授業の実施（特に理科・社会）について

① 学び方のわかる社会科指導の実施

昨年度全観点に渡って全国値を下回ったが、今年度は、ほぼ全国値と同等になるまで回復基調となった。しかし、観察・資料活用能力、思考・判断・表現能力が低調である所に課題がある。

また、AB層が40%を超えるがD層も30%を超えており、学年が上がると成績の2極化が顕著となっている。

この状況には、

- ・社会科の学び方がわからない（≒社会科の楽しさがわからない）
- ・社会的な考えを構築する基礎的な知識・用語・技能の不足

が深く関わっていると考える。

■問題解決学習の学習過程に沿った授業を実施する（社会科の学び方指導）



①基本的な学習過程に沿った授業の実施

この学習サイクルを1授業時間内で常に実施する。また、1単元内でもこのサイクルを活用し、1単元1サイクル（時には数サイクル）の学習過程で常に指導していく。

このことによって、社会科学習の進め方や次に何を学習するのかを予測しながら見通しをもった学習が出来るようになる。

②児童の興味関心を喚起する導入の工夫

本校児童は、社会科に苦手意識を持っている児童が半数存在すると考える。そのため、導入段階での内発的動機付けが特に重要である。今年度は、ここから授業の改善を図りたい。

■社会科学習を進める知識・技能の指導を実施する

①社会科の知識・技能の定着（ex.方位、地図知識、生活経験、既習事項）

・授業の中に、社会科学習の技能を使う場を設定する。

（ex.インタビューの仕方、インターネットの使い方、資料の使い方、新聞の書き方、発表の方法・技法 他）

・一授業時間内のまとめに、本時のまとめを「見える化+記録化」する。

②一単位ごとの既習事項のまとめを実施

・単元の中の重要事項は印刷物にして配布する。

・知識的事項・用語のミニテストを行う。

③知識を定着させたり技能を習熟させる時間の設定

・地図帳での地名探しゲームやフラッシュカード指導などの導入

・ICT機器を活用し、知識の定着と反復練習を行なう。

② 学び方のわかる理科指導の実施

理科の正答率は全校地と比べ、4年生±0p、5年生-5p、6年生では-7pと学年を追う毎に低くなっている。同時に、上学年にいくほど苦手意識が強くなり、関心・意欲・態度のポイントが低下している。これは社会科同様、

・理科の学び方がわからない（≒理科科の楽しさがわからない）

・科学的な考えを構築する基礎的な知識・用語・技能の不足

が考えられる。

また、最近、板書だけに頼る理科授業は減少したため、観察・実験の技能のポイントは全国値比では低いものの比較的良好である。しかし、その力が知識・理解や科学的思考力に結びついていない現状である。

■問題解決学習の学習過程に沿った授業を実施する（理科の学び方指導）



①基本的な学習過程に沿った授業の実施

この学習サイクルを授業で常に実施する。このことによって、理科学習の進め方や次に何を学習するのかを予測しながら見通しをもった学習が出来るようになる。

②児童の興味関心を喚起する導入の工夫

本校児童は、理科に苦手意識を持っている児童が半数存在すると考える。そのため、導入段階での内発的動機付けが特に重要である。

③科学的な思考力を育てるために

〔問題把握 → 結論〕 つかんだ問題に対する結論をだす。

〔予想・仮説 → 考察〕 予想や仮説についての考察をする。

〔観察・事件 → 結果〕 観察・実験をしてつかんだ事実を結果としてまとめる。

これらの関係性を指導していくことにより、科学的な思考力を育成する。

■理科学習で学んだ知識・技能の定着を図る

- ①学びの見える化を図る〔ノート指導〕
 - ・学習過程に即したノートのとり方を指導し、学習をよりよく記録させる。
(図や表、グラフ等を活用し、他に伝えられる内容のノートとする)
 - ・毎時間の終わりには、学習内容を記録させる“まとめ”の時間を作る。
- ②理科学習プリントを作成し、児童が家庭学習に活用できるようにする。
 - ・単元の中の重要事項は印刷物にして配布する。
 - ・知識的事項・用語のミニテストを行う。
- ③知識を定着させたり技能を習熟させる時間の設定
 - ・地図帳での地名探しゲームやフラッシュカード指導などの導入
 - ・ICT機器を活用し、知識の定着と反復練習を行なう。

(4) 課題設定と学習成果をまとめる時間の重視

「学習課題の明示」と「まとめの時間の設定」を授業に設定する。

■学習課題の設定■

- ・学習意欲を喚起する課題設定を工夫し、課題は必ず明示する。
- ・児童が学習の必要感（学習に対する内発的な動機付け）をもてるものとし、提示方法や提示のタイミングも工夫する。
- ・授業のねらいをシャープに定めた授業を実施する
「学習課題」は、指導者側のねらいそのままの表記ではなく、児童が学習する際に追究していく具体的な表現とする。

■まとめの活動の取り入れ■

- ・本時の締めとなるまとめの時間を必ず設定する。
- ・まとめは、文章化したり図式化したりして記録するなど、学習の足跡が残る形態を取り、学習内容の確実な定着を図る。

(5) 習得した学習成果の確かな定着を図る

■知識的な内容、技能のまとめを実施する

- ・知識的な内容、技能などについての確認テストの実施やまとめの印刷物発行等を行う。
- ・学習した内容を教室内に掲示するなどして児童が常時意識できるようにする。
- ・放課後補習の時間を活用し、社会・理科の学習事項のまとめ・復習の時間を確保する。
- ・理科・社会の授業では、知識的内容や技能を、“正確に定着させる”学習活動を必ず挿入する。
(知識事項は曖昧な言葉ではなく、正しい用語・正確な漢字表記で 等)
- ・家庭学習の選択課題学習とリンクし、学習成果の復習を推奨する。(学習日記など)

■学習記録〔ノート〕やワークシートの質を上げる

- ・ノートの活用を進め、基本的な記録の仕方を指導する。特に概念図にしたり、箇条書きでまとめたりするなどの手法も指導する。
- ・問題解決型授業に即したノート指導・ワークシート作成を実施する。
(学習課題・調べ・まとめなどを記録する形を指導する。)
- ・学習記録（社会科などの新聞、理科の観察カード等）は記録の仕方を指導するとともに、指導の意図を反映している作品は掲示するなどして、他の児童の手本とする。

(6) 学力向上を支える取組

■三吾「学習スタンダード」を基にして学習に向かう姿勢を育成する

本校の学習規律に関する共通理解事項をまとめた「学習スタンダード」を改訂し、全校で共通実施する項目（必須事項）を決めて実施する。

■三吾「家庭学習の手引き」を作成し、家庭学習習慣を確立する

- ・家庭学習をベース学習（悉皆課題）＋選択課題学習（自学自修学習）とし、習熟度の違いを考慮した家庭学習課題の提示を行う。
※1～2年はベース学習のみとする。
- ・選択課題学習は、学習日記や日記、俳句、詩の暗記・暗唱、ベーシックドリル、調べ学習等を想定する。
学習の習熟度が低い児童には、選択課題学習として担任がその児童の習熟度に合わせた課題を推奨して行わせる。
- ・家庭学習の時間は、明日の学習準備も含めて 毎日「学年×10分+10分」を基準とする。
- ・家庭学習の手引きを作成し、家庭学習の仕方の周知を図る。

■学力調査の方法に慣れさせる

- ・学力調査形式に馴染ませる
本校児童は、解答用紙が異なるなどのテスト形式に不慣れな児童が多い。中学校進学も見据えて、多様なテスト方式を経験させておく必要がある。学期末には、このようなテストを実施し慣れさせていく。
- ・テストの解説をし、テストの見直しをさせる。

■授業力向上をめざした授業研修の実施

算数・社会・理科の学力を向上させるには、教員の授業力向上が欠かせない。問題解決学習が叫ばれてから久しいが、一斉教授型授業から脱却できないところに、学力向上のネックがある。

算数では、学年が上げるにつれて学力が低下していくのは、真に算数の考え方、知識・技能を身につけていないからである。また、理科、社会科においては、その傾向が顕著であり、児童の関心・意欲・態度まで萎えさせてしまっている。

新指導要領が公示され、その対応が迫られている今、本校ではその研修の一環として、モデル授業を実施する。

モデル授業のねらいは、

- ・言語能力を基盤とした授業づくり
- ・問題解決型のアクティブラーニングの考え方を重視した授業
- ・知識や技能の確かな定着を図る授業

とし、教科指導の在り方を根本から考え直していく。